新戦略

熟練の技 ITで継承

丸井織物 (上)

品質を安定、効率化

能登上布の産地として知られ、「繊維の町」を掲げる石川県中能登町で約80年、丸井織物は布を織り続けてきた。本社第2工場内では、約200台の織機が「ザザザザザ」と、うなりを上げる。合繊織物の生産量で国内最大級を誇る同社の「心臓部」に響く鼓動は強く、激しい。

一人一人が手織りする時代はとうの昔に終わったが、糸の微調整やトラブルが発生した時には、やはり熟練の手が欠かせない。「現場を任せるには、どんなに早くても3年、やっぱり10年は掛かるな」。ある中堅社員が若手の作業を振り返り、つぶやいた。

全工程を把握

丸井織物は現在、生産工程をITで管理するIoT（さまざまな機器をインターネットでつなぐ技術）化を進めている。各工程から集められたデータを元に、いつ入荷した糸が使われ、誰が織り、織る途中に何度停止したか、その反物が仕上がるまでの履歴が詳細に記録される。織り上がった反物を検査する「検反」部門では、不良品の見逃しが3分の1に減ったケースもある。消費者が食品の生産から加工、流通などの履歴を知ることができる「トレーサビリティー」と同じような仕組みで、品質の安定、生産効率化に寄与している。

工程ごとに細分化された五つのチームがIoT化に取り組む。ベテランの技を若手にも共有するという目的が託された「タブレット活用プロジェクト」では、平均年齢35歳の若手と中堅10人とアドバイザーとして熟練したベテランが参加した。

虎の巻を内蔵

タブレットには「虎の巻」が内蔵されている。各工程のベテランの作業を動画で収録したものだ。若手が「コツ」を習得するための教材だ。

リーダーを務める丹後浩さん(48)は「難しいシステムを作ることが大事なのではなく、誰でも操作ができ、使いこなせることが重要になる」と指摘し、さらに改良が必要だと意気込む。

丸井織物がITを取り入れる目的は、単に生産効率を上げるためだけではない。ベテランが培った知識や技術と、若手が得意なITに対する敏感な感性を組み合わせ、製品の質を高めて新たな市場を開拓する。仕事への「攻めの姿勢」を養うことが、真の狙いだ。

「今ここで、変われるかどうか。旧態依然の待ちの姿勢では、生き残れないかもしれない」。宮本徹社長は口元を引き締めた。

織布の工程をタブレット端末で調べる従業員 ＝石川県中能登町の丸井織物

記者メモ

丸井織物（石川県中能登町）衣料、産業資材織物の製造販売。1937年、グループ企業の宮米織物が創業し、56年に丸井織物が設立した。2015年12月期の売上高は約82億円。国内グループ全体での合繊織物生産量は月800万㍍で、国内最大級となる。